町民文芸

只見短歌会　一月詠草

大塚栄一　指導

街中のポストの口に凍てつきし雪を払ひてはがきを落とす　古川　英子

秋更けて鵜の喉いっぱいに鳴く声悲しき叫びにも似る　小倉キミ子

七草の足りなき粥に慣れしごと黙しつつ食む夫の目は笑む　目黒　富子

元日の未明に床に入りしがはや除雪車の音響きくる　新国由紀子

飴作る度に思へり砂糖さへ無かりし時代の飴の旨さを　渡部ゆき子

老多き集落なれば救急車の音の続くを落着かず聞く　馬場　八智

高齢者の集ひも嬉し久々に運動指導を受けて賑はふ　関谷登美子

グループホームに行きし末の子の眠りしか吹雪の音の激しくなりつ　五十嵐夏美

降る雪の少なけれども寒くして蓄へ置きし野菜は凍る　渡部ヨリ子

年明けてまた入院し亡き夫の居りしベッドに臥すに驚く　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　二月例会

目黒十一　指導

一点の灯を信じ冬の駅　雪も止みやっと見つけし古写真　洋子

雪降れり会津の奥の無音界　遠山の雪食地形春浅し　恒夫

父母ありて水飴囲む雪の夜　信号も見えず今宵の雪二尺　敦子

弾き初めの正気満ちたる四線かな　雪の壁に新車転覆二月尽　吉児

串を抜く目刺目玉をこぼしけり　青天や真中は我が雪の里　礼

風呂吹きや自慢にしたる手製味噌　背戸山へ両手を挙げる御慶かな　邦夫

東の間の晴れや積もりし雪を掻く　元気です笑顔が浮かぶ年賀状　信

理髪店へ行きやれと言う冬日和　小正月座敷童を迎えんと　笑羊

虎落笛境に立てた竹の竿　豆柿を餌に小鳥や深雪晴　又壱歩

酷寒の朝や冷水飲み干して　我が採りし野菜どっさり雪籠　リウコ

房総の沖のはるかに初日の出　はるかなる姉ありし日の成木責　邦男

年神へ御平を供え棚仰ぐ　書初の火の用心くばる両隣　都

細雪眺めて飲むや夕餉時　氷柱噛むふと友垣を懐かしむ　藤彦

寒の水する事多き主婦の城　嫁に継ぐ凍餅を編む藁を打つ　一穂